

唐代における西方浄土変相図（西方変）については、松本栄一氏（1937年）による敦煌画を対象とした基礎的な研究以降、多くの研究蓄積がある。近年では、大西磨希子氏（2007年）が先行研究の図像分類の誤解も指摘しつつ、あらためて典拠としての『観無量寿経（観経）』の重要性を確認されるなど、大きな成果をあげられた。また、『観経』関連の初唐期造像としては、倉本尚徳氏（2019年）が龍門石窟における善導門下による作例を解明されたことも記憶に新しい。

いっぽう南北朝期の北朝作例では、小南海石窟の図像解釈が顔娟英氏（1998年）や稲本泰生氏（2002年）によって進められ、とくに稲本氏は、『観経』関連図像の『涅槃経』との接続、および十六観のうち後三観を重視し造形化するといった初唐期西方変にも連なるその先駆的意義について、宮治昭氏（1995・1996年）による中央アジア・トヨク石窟の十六観図像の分析結果も踏まえつつ明らかにされている。また、西方変など唐代浄土変相図の原型としては、南朝における浄土図作例およびさらなる淵源として皇帝の苑林が、三宮千佳氏（2014年）により指摘されている。

初唐期に隆盛する西方変の造形については、早くは塚本善隆氏（1933年）により「現世における帝王宮殿生活の理想的描写」などが想定されていたが、近年における研究の進展を踏まえれば、南北朝から隋代の段階で西方変の原型がどこまで形成されており、そして初唐期において、西方浄土変相図の図像および絵画表現として新たに形成されたものは何か、さらにその形成の背景にあるものは何か、『観経』や関連義疏のみならず、より広範な視点から、あらためて検討されるべき段階にあると言える。

本発表では、南北朝から初唐期の西方変および関連作例を考察対象として、とくにその建築描写と舞楽描写に注目する。建築描写については、近年における墓葬美術の研究成果を踏まえ、北朝後半から初唐期の宮廷周辺における建築描写技術の進展状況を復元した上で、初唐期西方変の建築描写の形成との対応関係を検討する。舞楽描写については、近年の伎楽研究や礼制研究の成果などを踏まえ、初唐期における礼制の整備とそれともなう伎楽の変遷、および墓葬美術との対応関係も視野に入れつつ、初唐期西方変の舞楽描写との連関性とその意義について検討を行う。

こうした検討をうけて、初唐期における西方浄土変相図の形成は、礼制の整備とそれに伴う伎楽実践からの反映が可能な場において、なおかつ宮廷周辺でも活躍し得るような優れた技量をもつ画家たちの手によって、なし得たものであったと結論づける。（1111字）